2019年度事業報告書

当、公益社団法人マスコミ世論研究所は、2019年度は以下のような事業を実施した。

１．草の実アカデミー（諸分野における時事問題について、マスコミおよび当事者視点による情報の普及、及び世論の健全な形成を促進する事業）

当研究所の40年近くに及ぶ世論運動の蓄積を受けて2007年末に生まれた「草の実アカデミー」は、二分化社会の中で、本来あるべきアカデミズムとジャーナリズムの視座を、圧倒的な大衆（＝草の実）の日常の声の積み重ねの中に探ってみたいと考えたものである。

在野の専門家達にスポットを当て、大衆の学びの場を提供する中での「草の実の世論」の錬磨を目指し、以下の取り組みを行った。

[1] 講演会、セミナー等の開催

① 講演会・セミナーの開催

原則月１回の定例開催を行い(今年度は12回)、延べ307人が参加した。各回、内外講師による講義（60～120分程度）と講義内容に基づく質疑応答およびディスカッション（60分程度）で、2019年度は以下の様なテーマを扱った。

- 荒川俊之氏（不公平な税制をただす会事務局長・税理士）
  過去の成功体験に学ぶ消費税廃止　～法人税・所得税・住民税の大改革を提言（4月21日）
- 渡辺照子氏（派遣労働者・女性労働問題研究会企画運営委員）
  誇りある派遣労働者が語る「幸せな生活への道」（5月18日）
- 岡本健次郎氏（ソーシャル・デザイナー）
  幸福のためのおカネの使い方！～反緊縮政策についてみんなで考える～（6月15日）
- 盛一克雄氏（国賠訴訟原告）
  警察の元Sが語る偽造調書作成「私は白紙の調書に何枚も署名捺印した」（7月20日）
- 寺澤有氏（ジャーナリスト）
  安倍スキャンダル本著者のツイッターアカウント停止（8月17日）
- 渡辺てる子氏
  れいわ新選組から立候補して何を得たのか（9月21日）
- 三宅勝久（ジャーナリスト）
  東北大学・総長の論文不正問題のいま（10月19日）
- 関良基氏（拓殖大学政経学部教授）
  堤防決壊の真の犯人はだれか～大災害の背景を考える～（11月16日）
- 田島泰彦氏（早稲田大学非常勤講師・元上智大学教授）
  言論とメディアはどこまできたか－ 東京オリンピックやGSOMIAなどを例に（12月21日）
- 小林蓮実氏（フリーライター／労働・女性運動等アクティビスト）
  南房総は革命後の世界だった！？ ～台風の傷跡生々しい南房総から～（1月18日）
- 高橋清隆氏（反ジャーナリスト）
  疾走する反ジャーナリスト高橋清隆が語る「なぜ山本太郎を追うのか」（2月15日）
- 緊急座談会　（林克明）
  コロナウイルスと私たち　～不安＆恐怖＆生活＆経済＆経済対策＆自粛と萎縮＆未来～

（3 月 21 日）

② 講演会・セミナーのインターネット中継と動画の保存公開

講演会やシンポジウムは、セミナー参加者やネットメディアによる放送の協力も得ながら、インターネットで中継し、映像をアーカイブとして保存、公開している。2019 年度は延べ４万７千人程度が視聴している。

③ ホームページやメールマガジンの運営

「草の実アカデミー・ブログ」や「草の実アカデミー・メルマガ」（今年度は 26 号を発行）を通じて、活動予定および実施した講演会等の活動内容についてタイムリーに広報し、テーマや講師陣などこれまでの実績を掲載した。また終了後の動画紹介や報告も掲載した。

［2］ マスコミ情報の収集・分析

① マスコミ情報の収集・分析及び調査結果の公開

ある時事問題に関する取材・著作などにおいて際立った業績を残している方や、中心的立場にある当事者へのインタビュー（取材）を行う。その調査結果は主に講演会・セミナーの企画に反映している。2019 年度の期間中に参議院議員選挙が実施された。争点のひとつでもある消費税問題に焦点を当てたり、実際に選挙活動をした人を招き、体験からみる日本の現状について語ってもらった。

② インターネット「世論力テレビ」局

新番組の更新はしていないが、過去の調査結果の一部について番組アーカイブやデータベースの提供は継続して行っている。

過去の調査結果の一部についてはインターネット「世論力テレビ」局で、番組アーカイブやデータベースとして提供している。

また、講演会などの映像資料の撮影･配信を参加者に依頼してインターネット上に保存している。

２．一般市民が語る戦場体験の記録・保存・継承に関する事業（戦場体験放映保存運動）

［1］ 世論資料の収集、研究

① 戦場体験のインタビュー記録の収集

体験者のインタビューは最も優先度の高い活動テーマである。

2018 年度から 3 カ年を目安に「『戦場体験　聞き取り全国キャラバン』の再出発」を掲げ、ハガキ付きのチラシを作成、会員ほか広く頒布して、改めて戦争体験者を募集している。

2019 年度は、茶話会開催をきっかけに鹿児島での体験収録や、戦犯家族、連合軍占領下の報道機関での速記者など貴重な証言が収録されたが、聞き取りボランティアの入れ替わりもあり体験収録は 20 名弱に留まった。戦争体験の継承に関わる他団体から記録を依頼されるケースは増えており、次年度の収録対象としたい。

一方 2018 年度の首都圏に続き、北関東の介護施設に、体験者の紹介やチラシの設置を依頼したが、こちらの効果は上がらなかった。

② 戦場体験の語り・継承の記録の収集

継続活動として、（ア）当時の書類や写真、（イ）体験者による記録（手記、日記、著作、絵画

など）、（ウ）体験者個人、および体験者の団体（戦友会など）が発行した書籍や冊子、（エ）戦場体験の語り・継承にかかわる活動の記録（講演会の記録など）を収集している。

2019 年度は「戦場体験者が遺した手記の展示会」（詳細後述）で、これまでに寄せられた手記や物品などを公開したが、これが契機となり新たな手記、戦地からの葉書、巣鴨プリズン内で作成された版画や冊子など多様な資料が寄せられた。

体験者が亡くなると、資料の散逸･破棄は予想以上で、引き続き積極的な取り組みを行いたい。

③ 戦後 70 年以降における戦場体験の継承のあり方についての検討

体験者なき戦後はいよいよ目前であり、また社会も体験者を介さない戦争の「語り」に移行していくと思われる。その中で戦場体験の継承はどうあるのが良いのか、体験者の証言記録をどう活用するのか、研究検討を重ねなければならない。

2019 年度は、これまで行ってきた茶話会形式の催しに併せて、故人の証言映像を用いた茶話会を開催。編集作品の上映ではなく、証言資料を配布し、参加者の要望や質疑に応えて上映箇所を選びながら進めた。直接の語りに近い訴求力を感じたが、その後の理解をどう深めるか、提供映像や運営にも試行錯誤を重ねたい。

また、戦場体験者の PTSD、戦没者の遺骨収集、地上戦民間被害者の戦後補償など、戦後 70 数年を経てなお現在進行形のテーマに関して、講演会を開催した（詳細後述）。

［２］戦場体験資料の公開、継承（戦場体験史料館）

① 「戦場体験史料館・電子版」

2013 年以降電子版の拡張は、Web 化の作業がボトルネックとなり十分とは言えない状況が続いてきた。そこで 2019 年度はサイトの一部にブログ形式を組み込む事で作業を簡易化し、新たに 50 名の証言（総計 200 名）を公開した。またブログ化により、証言と関連した写真や物品、絵画などの公開も容易になった。ただ写真等に関してはリスト化されておらず、検索にも適していないので、今後の対策が必要である。

また前期の miniDV で収録された証言映像について、2019 年度より外注でのデジタル化を開始、初年度はすでに証言概要を公開している 100 名についてデジタル化を行った。

このほか「戦場体験者が遺した手記の展示」（詳細後述）と連動して、一部の手記の公開を行った。

② “語り継ぐ”活動

（ア） 戦場体験者と出会える茶話会

2016 年以来開催している戦場体験者との茶話会は、体験者の証言を間近に聞き、対話も出来る場として、引き続き幅広い年齢層の多くの来場者を迎えている。

2019 年度は以下のとおり開催した。

◎5 月 4 日（土）、5 日（日）　　きゅりあん　イベントホール（東京都）

話し手として 33 名が参加、来場者は延べ 400 名弱。

同時に、故人の証言映像を用いた茶話会を初開催。中国、サイパン、インパール作戦、沖縄女子学徒隊の 4 名の証言映像について各々行った（詳細前述）。

◎9 月 15 日（日）～16 日（月･祝）　かごしま県民交流センターギャラリー２（鹿児島県）

鹿児島在住の体験者（賛助会員）の強い要望もあり、県内では初めての開催をした。

話し手として 5 名が参加、来場者は 2 百数十名。

併せて、全国で聞き取った戦場体験談のパネル、当時の写真や物品、地元の加治木空襲に関する資料など百数十点の展示を行った

◎12 月 6 日(金)～8 日(日)　　浅草公会堂　展示ホール(東京都)

話し手として 33 名が参加、来場者は延べ 500 名弱。

なお茶話会は、語り部活動を行っている若い世代にも活用され、また参加者によって自らのフィールドで同形式の行事を企画する試みも行われている。

（イ）　戦場体験者が遺した手記の展示会

12 月の浅草公会堂での茶話会では併せて、これまでの活動の中で出遭った方々から託されてきた「手記」の展示会を行った。出版や大量印刷をされておらず、耳目に触れにくいものを中心に約 30 点を紹介した。日中戦争初期の一兵士の日記や、沖縄戦を経験した下士官が収容所内で記した手記、BC 級戦犯が帰国時に記した一文など、その時期に記された事に意味があるものも紹介する事が出来た。

また展示では全文は紹介出来ないため、会場に読書スペースを設け、可能なものについては「戦場体験史料館・電子版」に掲載し、全文を読めるようにした。電子版掲載分についてはサイトの QR コードを会場内に展示したが、スマホから全文が読めると好評だった。

QR コードの活用による、実物とインターネットを組み合わせた企画は、様々な展開の可能性があり、今後積極的に取り入れたい。

（ウ）　沖縄の戦争展

6 月 22 日(土)、23 日(日)　　八重洲ブックセンター　ギャラリー(東京都)

2015 年以来様々な形で開催してきた沖縄戦に関する催しを、2019 年度は、より一般の人が目にする機会の多い会場で開催した。沖縄や移民先の南洋で地上戦を体験した人たちの証言パネルや当時の米軍写真に加え今回は、沖縄戦遺骨収集ボランティア団体の協力を得て、遺骨とともに掘り出された多くの遺物を展示した。

また今回初めて、実際の証言映像を見て語り合う場を開催。戦災孤児、本土出身の兵士と立場の大きく異なる体験を扱った。

さらに下記の講演会を開催、共に百数十名が参加、講演内容は「史料館つうしん」にも収録した。

・記憶は風化しない　～沖縄戦の PTSD、福島の震災後ストレス症状について～

精神科医　蟻塚亮二先生（10 年以上沖縄で診察を行い沖縄戦の晩発生 PTSD を見い出す）

・未完の戦争　1 部：民間人戦後補償　2 部：戦没者遺骨の戦後史

毎日新聞記者　栗原俊雄氏

（エ）　交歓会

元兵士と戦争を知らない世代のボランティアの交流の場を 3 月に予定していたが、新型コロナ拡大の影響を受けて無期限延期とした。

③ マスコミなどへの情報提供

今年度は以下のような情報提供や催し、取材への協力を行った。

・学生イベント「History for peace 生の声で聴く 6 テーマの戦争体験」に体験者を紹介

・「平和のつどい・のだ 2019」で沖縄戦のパネル展示と中田理事の講演会

・文京区「清林寺」講話への体験者の紹介
・NHK スペシャル「激闘ガダルカナル悲劇の指揮官」に資料提供
・朝日新聞　8 月 15 日紙面に体験者を紹介
・読売新聞　石川支局連載「参謀辻政信の肖像」に体験者を紹介
・文化放送「大竹まことのゴールデンラジオ」8 月 12 日～16 日放送に体験者を紹介
・Channel NewsAsia（在シンガポール）に体験者を紹介
・共同通信　遺族団体を紹介
・朝日新聞　声欄（2020 年 2 月 15 日）に資料提供
・文化放送「大竹まことのゴールデンラジオ」東京大空襲ウイークに体験者を紹介

④ 戦場体験放映保存運動に関する広報活動

（ア）　「史料館つうしん」の発行

2019 年 6 月、11 月に発行した。

以上